

『戦中・戦後の暮らしの記録 君と、これから生まれてくる君へ』

いよいよ7月24日(火)から全国順次発売予定です！

企画立案から約二年、ようやく一冊の本が、来週具体的な「かたち」となってお目見えします。戦争を二度と繰り返さないために——これから生まれてくる君に、「ようこそ、ここはいい世界だよ！」って、いつでも笑顔で迎え、祝福できるように。

今も10年後も20年後も、ずっとずっと伝えていかねばならない、先達の貴重な体験談を凝縮しました。

2018年夏。

君という美しい命は、偶然灯された一閃の光だ

君、忘れてはいけない。きのう、戦争があったのだ。昔むかしの物語ではない。その大きな戦（いくさ）は、昭和という時代、二十世紀にあった。

君がきょう歩いているかもしれない美しい町は、かつて亡きがらが転がり、いたるところが墓地となった焼け野原。空から日夜恐怖が降ってくる、地獄の土地だった。そんなところで、それでも人は……君の父や母の父や母、祖父や祖母は、生き続けた。生き続けたから、君がいる。君という美しい命は、未曾有の戦災をкаろうじてくぐり抜けた人、その人を守った誰かの先に偶然のように灯された一閃の光だ。

我々は『戦争中の暮らしの記録』から半世紀経ったいま、もう一度訊く。あの日々、どう暮らしたか？ どう生きて、どう死んだのか？これが最後のチャンスかもしれない。急げ急げ！

この新たな本では約百編の応募作文を掲載する。名もなき庶民の、胸を激しくゆさぶる言葉に、触れてほしい。それは、我らの肉親からの現在形の叫び、愛だけから成るメッセージだ。

いま、この一冊を手にしようとする君がもし若いとしたら、平成に、あるいは二十一世紀に生まれた人かもしれない。だが、君が誰であろうと、忘れてはいけない。

ドアの向こうに、次の戦争が目を光らせて待っているということ。

人類の短い歴史とは、戦争の歴史であるから。戦後とは、戦前のことだから。先の本のメッセージを、繰り返す。「これが戦争なのだ」。それを知っておきたい。君に知ってもらいたい。

できることなら、君の後に生まれる者のために、そのまた後の者のために、この新たな一冊を、たとえどんなにぼろぼろになっても、残しておいてほしい。

(本書編集者巻頭言より抜粋)